

明治維新前の土佐の精神的風土と女性（その二）

柴田 静意

目次

四 一条氏の文教

- (1) 一条氏土佐下向の経緯
- (2) 一条氏の中村開府
- (3) 大内氏と一条氏との文教の関連
- (4) 一条氏の文教

五 南学の濫觴

六 吉良氏の文教

- (1) 南村梅軒
- (2) 吉良宣経
- (3) 吉良家の二柱石
 - (イ) 大高坂経久
 - (ロ) 吉良宣義
- (4) 吉良氏文教の最後の華
 - (イ) 吉良求馬の奮戦
 - (ロ) 千徳丸の初陣
 - (ハ) 慈母の悲歎と宣直夫人の孝養
 - (ニ) 吉良ヶ峰城の落日と夫人達の貞烈

(以下次号)

四 一条氏の文教

(1) 一条氏土佐下向の経緯

南北朝時代、国内で内乱が続発するなかで、諸国の守護は地頭や豪族を押さえて次第に勢力を強めていった。

当時の土佐は足利氏の一門、細川氏の一族が守護代として大いに威を張っていたが、その統制力の衰微につれ、鎌倉時代より勢力の拡張を目指してきた地頭や土豪達が次第に抬頭し、各々自立すべく活発な動きをみせてきた。このようにときに中央で応仁の乱が勃発した。

有史以来の大乱、応仁の乱で数百年來の都の榮華は悉く灰燼に帰して滿目蕭條たる焦土と化し「なれや知るみやこは野辺の夕雲雀、あがるをみても落つる涙は」という前代未聞の慘状を呈した。宿るべきすみかを失った人々は縁故を求めて都を落ちざるを得なかった。

このとき、五摂家の一つ左大臣前関白従一位、一条教房は父兼良と共に奈良に難を避けていたが、応仁二年（一四六八年）摂津から嗣子房家を伴い多くの随従と共に累代の莊園である土佐西南の地、幡多莊へ下向した。

幡多莊は遠く平安朝の古より藤原氏が莊園として有していた。のちに九条家の所領となり、建長二年（一二五〇年）九条道家の第三子実経が一条氏を創立した際多くの所領を与えられ、この地も一条氏の莊園となった。

この莊園の中心であった中村に年貢が集められ、しまんとがわ四万十川の下流下田から京へ送られていたが、兼良の時代に至ると室町幕府の威力衰え、豪族達が莊園を侵略する状態となり兼良をして「土佐国幡多郡有諸村々等、当時雖有_ニ知行

之号「有名無実也」⁽¹⁾と嘆かせた。

戦乱の京に住めなくなったので、教房は莊園の回復も図るべく騷擾のみやこを逃れる決心をしたことが次のように記されている。「一条殿之下⁽²⁾幡多⁽²⁾相伝幡多是一条家傳領之地應仁之乱後道梗租税不入故下⁽²⁾房家卿為⁽²⁾代官云此説比⁽²⁾諸家⁽²⁾最為⁽²⁾穩當⁽²⁾」

(2) 一条氏の中村開府

海路、土佐幡多荘に下向した教房は中村に館を構え、侵された所領を次々に回復し、豪族達をその支配下におき、自家の家臣団も組織を新たにして勢力を整え国内の平穩化を図った。

一方産業を開発し、木材はじめこの地方の物産を下田港より上方⁽³⁾へ輸送し、また下田港を対明交易の中継地とし、唐船を建造して遣明船を出し、商業、交易の振興に努めた。⁽³⁾それ故所領の年貢と併せ豊富な經濟力を有し、その財力で朝廷に献金したり茶碗、扇、緞子、貂皮⁽⁴⁾などを献上したりしている。⁽⁴⁾

教房のあと房家の代には將軍義政より土佐国司に任ぜられ先代の館を大いに修理整備し（中村御所といわれた）これを中心として、京のみやこに擬して碁盤目の街づくりを行い、また京の祇園社、五条神社、鞍馬奥御前社、日吉神社、泉神社、奈良の春日神社、殊に山城国男山八幡宮を不破に勧請して郡の総領守とするなど辺地にかゝわらず多くの神社仏閣を造営し、敬神崇祖の良俗を奨励した。この永祿年間の造営になる不破八幡宮の本殿は、今日、国の重要文化財の指定を受けており、今なお盛大な神事が催されている。⁽⁵⁾

また、この地を回る地形が京に似ているところから、川には鴨川の名を附し、山々には京の東山、西山になぞらえ

た名称をつけ、京をしのんだ。

当時、国内あげて干戈暇ない日々のなか、殊に京から遠い土佐の辺地の人々を驚かす衣冠劍履の都ぶりは、まさに別天地の桃源郷で、この時代に礼楽文華を誇ったのは大内氏の周防山口と一条氏の中村であった。

土佐一条家は「以_ニ教房公之子権大納言房家卿_一為_ニ土佐国主_一俗是号_ニ土佐一條_一自_レ是以_レ来房家一男権中納言左大将房冬、房冬之子右中将阿波守房基、房基之嫡男権中納言康政相嗣」とある通り、撰錄の嫡統として門地高く代々、土佐在住のまゝ高位の朝官に列し、辺地に在りといえども都の榮華をこの地に開いていた。

しかし五代兼定の時代に長宗我部元親に亡ぼされ、それより二代あと、名家土佐一条氏はあえなく百三十余年の歴史を閉じた。

(3) 大内氏と一条氏との文教の関連

周防の大内氏は、本州西端の名族で、広大な領国を有し、更に明・韓との交易により、その財力は当時の候伯中首位を占めていた。また交易によって彼の国々より文教上多大の影響を享受していた。

この大内氏は代々有文の将多く、絶海、岐陽、惟肖禪師や、それらの弟子達との関係が深かった。また薩摩学の開祖と称される桂菴禪師も九州に渡る前、石見、周防に住したことがある。このように大内氏と京の禪門とは密接不離の係りがあり、大内氏の文教興隆には禪僧の教化が与って力があつた。

加えて応仁の乱以後は、殊に京より公卿の来投著しく大内氏は更に促進され盛況を極めるに至つた。

最も家運の隆盛をみた義隆の時代は大内文教の爛熟期で、義隆も殊に学を好み、とりわけ朱子学に重きをおいて巨

費を投じて儒学の振興を図り、大内学として燦然と輝く時代を招来した。

この大内氏と一条氏は共にわが国有数の名門で、大内義興の息女は一条教房の嗣、房家の室となり、房家の三男義房は義隆の養子となっている。このように両家は姻戚関係にあり、その間の交流の緊密な関係は疑うべくもなく、毛利隆元日記、天文七年三月十一日の記に「於_ニ御殿中_ニ御能候、隆元御賞翫候_テ、土佐_之公家御賞翫候、二日御屋形様土佐衆御暇乞ニ湯田迄御出候_ト」⁽⁷⁾と見え、両家の親交の深さを物語っているが、文教面においても相互に多大の影響があったことは自然の趨勢で、この流れからも土佐に程朱の学の交流があったと考えられる。

(4) 一条氏の文教

教房の父、兼良は高貴な家格ゆえに朝儀に精通し、和漢古今の学に涉り、博識多聞の才は当代随一とみられ、殊に和歌、神道、儒仏、何れも蘊奥を極めた。またその学をもって將軍義尚に治国平天下の道を講じて施政への貢献なみなみならぬものがあつた。

一条家累代の文庫は京都一条坊門邸（桃華御殿という）にあり、和漢の書が大集蔵されて「桃華坊」とよばれたが、応仁の乱で諸国の烏合の雑兵に蹂躪され一条邸と共に焼失した。この時兼良は声を放って慟哭したという。この文庫の蔵書数は三万五千余巻であつたと、本居宣長の「玉かつま」⁽⁸⁾に記されている。このことは誠にわが国文献史上の一大損失であつたのである。

兼良は曾祖父の朱子学好学の庭訓と、その庶兄、一慶雲章の影響も受け、厚く程朱の学を尚んだ。その著、尺素往来に「程朱二公之釈。可_レ為_ニ肝心_一候也_ト」⁽⁹⁾と記している。

彼の著書には「公事根源」「樵談治要」「文明一統記」「代治和抄」「二判問答」「日本紀纂疎」「尺素往来」「東齋隨筆」「桃華藥葉」「除官雜例」「花鳥餘情」「歌材良材」「雲井春」「四書童子訓」「新玉集」「筆占」「令抄」「源語秘訣」「小夜寢覺」「連珠合璧」「元享積書註」など多数ある。

兼良の兄弟五人はすべて僧侶となったが、殊に兄一慶雲章は、義堂周信の教を受けた岐陽方秀門下の俊秀で、東福南禪に座して、内外の典籍に通じ、学名高く、後小松天皇に召され元享積書の御進講もつとめた。法門にありながら程朱の学に造詣深く、その鼓吹にあずかって功績顯著である。

また兼良の弟で夢窓国師の法孫に当たる微听東岳も学才深く、明に渡り儒仏並び伝え、のち相国、天龍、南禪を歴住した。

更に、京一条氏を継いだ兼良の次子、冬良もまた学有り「増鏡」⁽¹⁰⁾を著している。

このように一条氏一門は僧俗途を異にしながら、夫々才学たけ、当代の泰斗として五山並びに紳縉間を風靡し、程朱の学は一条氏一門の家学と観られる。

兼良の長子教房は、こうした家学を受け、のち関白も務めた人物で「和漢才有識、禪間（兼良）不可有勝劣」⁽¹¹⁾とあるように、父に劣らず和漢の学に長じたといわれる。しかし戦国乱離のさなか、異郷での創業にいとまなく、その学究的事蹟はなかったか、或は家門の滅亡によってその跡が失われたか、文献に残されたものがあるか否かは不明である。

教房は土佐下向後十二年で死去したが、「大乘院寺社雜記」文明十二年十二月七日の条に「国人十余人入道了」⁽¹²⁾とあり、如何に徳望厚い公卿であったことが推察される。

この頃の京の公卿文化は、有識の学と漢学、和歌、蹴鞠等王朝文化華やかな時代で、これらも一条氏と共に土佐に移植された。

一条氏の末年、その従臣小浜左京の子雲井禅師は幡多より出て、京都妙心寺に上り、その後、仙台藩主伊達忠宗の招きにより松島瑞巖寺の中興となって、勅諭、慈光不昧禅師の号を賜った。

同じく一条家付随の紳縉、飛鳥井雅量の後裔、鹿持雅澄は幕末、近代万葉学の大家として「万葉古義集」百五十二巻の大著を著わしたが、これは明治天皇の御心によって勅刊の榮譽をになった。

また文化文政の頃、中村にでた儒者、遠近鶴鳴の門下より幾多の傑人を輩出し、明治維新の際、国事に貢献するな⁽¹³⁾ど一条氏文教の余韻は永く土佐の地に香りを留めた。

五 南学の濫觴

土佐の文教を考察するとき、その根幹をなすものは海南朱子学、略して南学とよぶ純朱子学派の学統がある。南学の主唱者は土佐出身の朱子学者、大高坂芝山^{おおだかさしざん}で元禄十年「南学伝」を江戸で刊行し、南学という名称を用い、南学の始祖は南村梅軒であると述べている。

しかし南学発祥の素地は遙か古よりあったと考えられる。すなわち南学の濫觴は梅軒を遡ること二百余年前、夢窓国師により流入された臨済禅に胚胎されると考えられる。国師の法灯は、義堂、絶海、鄂隱、俊承、旭岑など京五山の高僧達により吸江庵において継承され禅儒並び伝承された。土佐は都より遠い辺境の土地故、儒学は明経家の影響を受けなかった。禅法挙揚の方便として禅僧により、伝授の束縛を受けない新註学が流布された。よって梅軒出現以

前に梅軒のような禅儒の存在は推察に難くない。⁽¹⁴⁾

また高岡郡の津野氏は平安貴族藤原一族の出で京との交流深く、加えて夢窓国師が津野氏に迎えられ須崎に海蔵寺を建て、以来、五山及び吸江庵との関係密で、京の文教移入に努めてきた。

一方、禅寺も逐次各地につくられ、京へ上って修業する僧もふえ、京五山とは密接な関連が持続された。

また、一三八十年代、足利一門の細川氏が守護代となり、土佐の国府にほど近い香美郡田村荘に館を構えて威を張った。この地は水陸交通の要衝に当り、土佐最大の規模を誇る城館を構築して豪族達への押さえとし、傍ら交易を盛んに⁽¹⁶⁾行い大いに利を得ていたので京の文化の流入があったことは推知できる。細川氏一門は好学者多く儒学に通じていたから、その影響は土佐にも及んでいたと思われる。⁽¹⁷⁾

なお、幡多郡中村の一条氏の文教は、父、兼良に劣らぬ学才を有すといわれた教房によって華開いたのである。また儒学が隆盛で百花撩乱の観を呈していた大内氏との特別の関係も、一条氏の文教に多大の寄与があったことは否めない。

以上の如く、土佐には文教面で京の影響を色濃く享受していたことが想像される。その悉くが直接南学と連繫されずとも、混沌たる状況ながらも南学を受け入れる基盤は充分に敷設されていたものと考えられる。

わが国に伝来した朱子学は朝廷や禅門に流行し、次第に諸侯伯及び武士階級にも浸潤していったとはいえ、いまだ大衆にまでは波及しにくかった。

こうした時代に、周防から土佐に來た南村梅軒の学によって、吉良氏一門の一般武士達まで啓発され、その学風が大衆の日常生活規範にまで及んだことが土佐における斯学発展に寄与した。

六 吉良氏の文教

(1) 南村梅軒

梅軒は周防の大内義隆の御伽衆として仕え、義隆の学問奨励に梅軒が大いに翼賛したということが「大内氏実録卷廿四、梅軒伝」⁽¹⁸⁾に記されている。

梅軒の土佐来向の理由は不明であるが、天文末年頃（天文十七・八年頃といわれている）吾川郡吉良ヶ峰城主、吉良宣経の賓客となった。そして梅軒は吉良氏一門を海南武士として陶冶し、学ぶところを直ちに実践する独得の学風を打ちたてた。これが土佐人特有の気風と相俟って後世に範を垂れるに至った。

しかし、宣経の死に遇い、彼は周防に帰り大内義長に仕えた。⁽¹⁹⁾

梅軒について、南学伝に「常読孝経四書。間講孫呉。巍尊道義。淵默躬行。為人冲澹恬静。不羨榮曜。咬得菜根。簞瓢晏如。」とあるから世俗を超越した崇高な風骨の人となりで、孝経、四書を常に読み、その傍、孫呉の兵法を講じた道義の人であったことが判る。

梅軒は、宣経の「儒者の学とは如何」との問に答えて、

「儒とは物學する者を總て稱する詞なり。古へよく小人の儒、君子の儒と分ちたり。或は達儒、腐儒、眞儒、曲儒などとも云へり。小人の儒とは、記誦の末を務めて義理の源に昏く徒らに名を賣り禄を買ひ凡そ利習に引かれ私欲のみ計る者はなり。腐儒とは、文字言句の故紙の迹に拘はりて當世一般の事務に用立たざる者を云ふなり。曲儒とは、

心、頑曲偏頗にして只管古道を引いて今政を謗り己が身には求めずして人の非をのみ悔み文才辯舌を巧にして惡を彩り非を飾る者なり。概して是を俗學と名づくるは、古の書傳を讀むといふとも心は俗人と均しければなり。君子の儒とは、仁義を講じ習ひ、身に行ひて心を得綱常彝倫の大より起居飲食の小に到り、幽にして鬼神の道顯にして天道の理まで周く通じたる人を尊稱して云へるなり。達儒とは、心活き動き左右自在にして、事に當り物に接り機に應じ變に従ひ混々として道義出で来る。其の四通八達なる事長江大河の水の流れて滯らざるが如くなる是なり。眞儒は眞箇に大道を自得して言と行と一致にして詐りなく、心と貌と一向にして雜はらず。君父に事ふるも是れ此の道を以てし、臣妾を使ふも是れ此の道を以てす。家を齊へ國を治むるも是れ此の道なり。天下を平かにし四海九州へ弘め行ふまで皆是れ此の道にして聊か他術を假りて雜ふる事なき者なり。概ね是を経業の學と云ふ。又、性理の學とも云ふなり。」と説いている。⁽²⁰⁾

梅軒は、儒學を六つに分け、小人儒、腐儒、曲儒をいたく排し、仁義、忠孝の道德を体得し実践せんとするものを君子儒とし、それを臨機応変に活用して道義に適う境地を達儒とよんだ。前者は理の修得であり、後者はその応用で、体と用との違いである。この二者を合したものが眞儒で儒の極地を闡明にしている。

梅軒は、大道を自得し、言行一致で道義を貫く眞儒の域に到達するをもって儒の理想とし、これが修身齊家治國平天下の要訣であると説いている。元來儒學は仏學と異り、出世間的なものでなく、現世の人間生活、五常の倫理學である。そもそも土佐人は古より、南方的な明るい風土に生活しているので、至って現世的で、およそ來世のために現世を犠牲にするなどの觀念の稀薄な、生活意欲旺盛で隱遁的な氣風に乏しい。

こうした土地柄の処へ、緇衣の梅軒が入って來たのである。法体はしていても梅軒は禪門を叩かず、直に戦亂の真

只中の弘岡城主の前に現われ、「儒学とは何ぞや」と尋ねられた時、記誦訓詁の学を説かず、或は戦乱の世につきものの権謀術数の霸道を進言することなく、「如何に生くべきか」という道義の学を披瀝した。この修身齊家治国平天下の学こそ土佐人の好む現世生活の指標であり、梅軒学の基盤で、梅軒の播いた学風は、土佐人の現世的本能と履践主義に培われ独得の氣風を有する南学に育っていった。

梅軒は、道義の学について述べたあと、修学の方法についての問に対して、

「四書に詳かに備りて欠くる事なし。よく習うて曉り給うべし我又何をか説きなん」⁽²¹⁾と答えているが、書物を講ずるよりも精神の鼓吹を重んずる彼の存念が溢れている。

また、日常修養の工夫についての宣経の問に、「身に反し尋ねて獨を慎み、人を尤むるに薄く怨に遠ざかるにあり」⁽²²⁾と教え、

更に、家老、宣義に「進_レ学有_レ漸。毋_レ欲_ニ速成_一。唯當_ニ循々不_レ已矣。不_レ已則遂必有_レ得焉。既有_レ得則又不_レ能_ニ自_一已。故學而三年無間斷。則許君必有_レ所得也」⁽²³⁾と修学の秘訣を述べているが、これは古今不変の真理である。

また、日頃、梅軒に学ぶ者達に対して、日用修為の工夫について、必ず、存心、謹言、篤行の三事をもって「三事為_ニ修為之基_一。道雖_ニ広邇_一。其實備_レ己。認_レ得為_レ己。則弗_レ繇_ニ貧富_一而添減_上。弗_レ繇_ニ利害_一而浮沈_上。確乎操定。是学問之効驗也」⁽²⁴⁾と教導した。

梅軒の師については不明であるが、彼は京学派系統に属すると思われ、儒を崇び、程朱を重んじ四書をもって最高の經典としている。しかし当時の風潮と同じく、修心の法として禅の必要性を強調している。すなわち

「禅家の大旨は、直に心を指し示す。文字を立つることを假らずと有り。定_{じよう}に入りて兀坐すれば、塵を拂ひ相を離

れ、念を絶ち情を忘れて気醒々として心靈々たり。萬事皆了々として月風共に洒々たり。塵縁尚ほ頓に起ることあれども悟入の者は手に從ひて即ち滅すること浮雲の目下を過ぐるが如し。大明は本と昭々たり。予固陋にして歩を眞儒の道に歧くわだつること能はず、叩たたりに自ら謂へらく、五常三綱の道は眞に天地古今人間世界を持ち立つべし。諸子百家是を改め替ふること能はじ。但し明に此の心境を曉る事は禪法に如くはなし。心は身の主にして萬の根なり。心根若し落々として定靜なるにあらずんば何を以ってか日用の事をなさん。⁽²⁵⁾と述べている。このように、朱子学と禪の心法を渾然一如とした学風が梅軒学であつた。

梅軒の土佐在住の期間は決して永くはなかつた。しかし稀世の名将、吉良宣経の知遇を得て五常三綱の道德価値を掲げ、これをもって修身齊家治国平天下の道を示し、学ぶところを直ちに履行すべしと烈々たる精神教育をした。

また「学は士の道を踐まん為なり。士とは事なり。四方に事ふるを以って名とす。所謂弧矢の志是なり。又曰く士とは仕なり。学を以って位に居るの名なり。所謂士は事なくして食するは素餐なり。又曰く士とは死なり。節義の操、死に至りて變ぜず。」⁽²⁶⁾と述べている。このように節義を貫くためには己の身を顧みず所信を断行し、死すともその節を曲げない精神は、土佐文教の骨子となつた。爾來三百年間、土佐人に嚮うところを示し、幕末、天下を風動するに至つた。「賢君起れば必ず名人来るは類を相求むるなり」の言の如く、日月は短くとも梅軒と宣経とは、師弟ともに肝胆相照らす仲であつたが、偉大な学徒であつた宣経の、天寿を全うさぬ陣中での死により両者の師弟の縁は終りを迎えることになった。同じ梅軒の学徒であつた老臣、宣義の

英雄謝去就成勲 更悼義旗無糾軍

薤露湿衣秋夜冷 芻靈自束使從君

という主君追悼の詩に、梅軒は

梁山乍圯惜無勲　　宮内妖星阨蜀軍

炎德喪輝龍既踣　　何人又染素糸君⁽²⁷⁾

と韻を和して返し、やがて土佐を去った。

大高坂芝山は、

「南村有梅。幽芳絶妍。孤立万花之頭上。獨步天下之春先⁽²⁸⁾。」と賛を贈っているが、実に梅軒は南学の先覚者、

偉大な教育者として南学史上、赫々たる足跡を印したのである。

(2) 吉良宣経

南学初頭において南村梅軒の功績は看過できないが、梅軒の学を成功に導いた功の一半は吉良宣経にあるといわざるを得ない。

宣経は、源頼朝の実弟、希義の後裔で「為人温和聰敏。屈義從諫。文不委靡。質不鄙野。」という人となりで、そのため「国郡整理。諸士心服⁽²⁹⁾」の示す通り、よく領内を治めた。

この時代は、ようやく一条氏の威令が地に落ち、豪族達は互に遠交近攻の策を弄し、晨^{あした}に一城をとり、夕^{さい}に一壑を屠る戦国の世で、治乱興亡寧日なしという世相の最中であつた。このような時に梅軒に師事し、夙夜勉強に励み兵法を窮めるということは稀にみる好学の君主であつたことが判る。梅軒が「心は身の主にして萬の根なり。心根若し落々として定靜なるにあらずんば、何を以てか日用の事をなさん。但し此の心境を曉る事は禪法に如くはなし」と説い

たのに対して、宣経は「梅軒が論辯誠に痛快明斷なりと云うべし。但し存心の處に我が儒の居敬を説かずして禪學に流入すること我甚だ惜しむ⁽³⁰⁾」と、あとで批判しているのをみれば、宣経は梅軒の學を崇び學んでゐるが、それ以前に既に程朱の學の素養を有してゐたことが窺える。

宣経は嘗て、その子、宣直に訓えて、

「明君有^二四得^一。得^レ己而後得^レ取人。得^レ時而後得^レ勝敵。智到^二遠制^一敵。故克永保^二其邦家^一。暗主有^二四失^一。失^レ時而後失^レ勝敵。失^レ人而後失^二自己^一。惛到^二近忘^一己。則貽^二戮辱於後昆^一爾。其明暗之分。不^レ可^レ不^レ辨也⁽³¹⁾。」と四得四失の戒めをしてゐる。

また「宣経幕下の大将に語り給ひしは、凡そ一郡一縣の主たらん者は四つの謹あり。

第一は己が行儀正しく作法の違はざるを本とす。身は子の綱、妻の紀表、民の柱なり。己正しからざれば下に則²を取る所なし。何を以てか人を治めんや。

第二には人を要とす。剛なる者は剛なる所を使うて虐^きなはしめず。柔なる者は柔なる所を使うて靡^なかしめず。智なる者は智を用ふる所あり。辨なる者は辨を用ふる所あり。愚なる者、拙き者は必ず誠あり。これをば其の誠の一方を使ふなり。妄に人を捨つることなかれ。彼の奸邪にして友の能を妬み陰佞にして身の為をのみ計る輩は、君長へ忠を盡さず、明友へ誠の交りなく、大に家の妨げを作し、禍を生ずる者なり。是をば遠ざけ棄つべし。

第三には慈愛なり。古へより君は首の如く臣は手足の如しと云へり。首なければ手足を總ぶること無しと雖も手足なくば首有りと何をもたのみてか用をなさん。是を以て君は舟、臣は水に喩へたり。然らば臣士を恵み憐むこと眞に手足の如くすべし。恩を與へ情を加へざる臣士は主人の用に立ち難し。農民は国の本なり。桑麻五穀なくば寶玉も身

を温むべからず。金銀も腹に満つべからず。尤も愛すべき者は民にあらずや。但し、農桑の勤めには怠らしむること勿れ。民の勤めを忽ゆるがせにせざれと古人も宣へり。一人耕さず、一婦織らざれば其の国飢寒を受くと云へり。

第四には、敵と味方とを知るなり。敵は是剛きか、弱きか、智ありつるか、愚かなりつるか、逆なりや、順なりや、富めるや貧しきや、時を得て勢に乗れるか時に違ひ勢を失ひたるかと考へ計り、又、此の十事を以て味方如何と顧みて、相似たる時は自ら持して深く計る、味方如かざる時は或は逃れ潜り、或は服し従ふ。敵失ひて味方得たる時は敵を服し従ふる、服従せざれば討ちて必ず破る。此の四ヶ條は一郡一城に施すのみにあらず。國に行うとも可なり。天下に弘むるとも不足なる所なしとぞ教へられける。⁽³²⁾と四謹の戒を述べているが、これは、麾下の諸將に嚮うところを示した訓令である。その第一条に、自己の道徳修養が將たる者の道であると、第一に挙げていることは、干戈を事とする戦国武士に対しては異例の訓令で、宣経が道義を重んじ聖雄と称えられる所以もこゝにある。第二条では、人それぞれの個性をみて取捨すべしと、人の選択の尺度を示し、第三条には、封建治下の領主に稀な仁君の徳風が現れている。第四條は、戦鬪の心得を余すところなく喝破している。

宣経は、この四謹の戒の他に、重臣、宣義と図り、部下、領民のために二十四ヶ條から成る吉良条目を定めた。これは甲斐の信玄家法に匹敵されるものであるが、それよりも十年余り前に制定したもので土佐における最初の成文法であり、また最初の武家法である。この法の根本は南学精神で一貫されており、土佐戦国時代の法制として伝わる唯一のものである。⁽³³⁾

その第一条には「諸士は國の屏衛なり、常に恩を厚うして大なる咎にあらずんば述あとしき式没収すべからず。」と定めている。第二条に「農民は國を養ふの本なり、宣しく憐憫して飢寒に及ばしむべからず。田地二町以上耕作する百姓には武

具を与えて武藝を習はしむべきこと」とある。

第一条は、戦国の世で武士が国を守る任にある故、それを優先するのは当然であり、第二条で農業立国の考慮から武士に次ぐ階級として百姓を大切に扱っている。特定の百姓を農兵とする着想は、後代の長宗我部元親の一領具足制度への移行をみ、山内藩になってから郷士制度へと発展し、やがてこれが幕末の土佐勤王運動へと一連の流れをなすに至った注目に価する法である。また「宣しく憐憫して飢寒に及ばしむべからず」の項に至っては、農民を搾取の対象としかみない領主も数あるなかで、愛民精神溢れる条目を冒頭に掲げる仁君の風貌が滲みでている。

第三条に「孝は百行の本、忠は義を行ふの根なり。人々忠節孝行を勵み志すべき事。」とあり、戦国の世に武將が部下に忠節を訓することは当然であるが、乱世に孝道を啓示するは、正に儒教精神の唱導者で、信玄家法と共に戦国法制中、孝道を挙げた双壁である。³⁴

また「不孝不忠或は妻を虐し下人に恩なき輩は了簡を以て其の咎あるべき事」という禁制の目が定められているが、不孝不忠は南学の精神に最も悖る行為で禁制であるべきは勿論のことであるが、そのあとの定めは当時としては異例のことである。封建時代には、妻妾奴婢などと卑しめられ、人間として価値を認められなかった頃に、宣経はこうした弱者に法の保護の手を差し伸べた。このように武將でありながら徳治主義によって領民を愛撫したのは宣経の天与の資質と文教のしからしめた結果とが相俟ったものである。

前述のように四謹の戒の最後に「此の四ヶ條は一郡一城に施すのみにあらず。國に行ふとも可なり。天下に弘むるとも不足なる所なし」と結んでいるが、宣経は祖先の名譽のためにも、中央に討って出て天下に号令せんものとの意気に燃え、またそれに価する器量と門地を有する武將であったが、不幸にして天文二十年（一五五一年）陣中で三十

八の齡よゐを閉じた。

世上、いわゆる仁君に雄略なく覇者に徳業なしというが、宣経は正に両者を併有する名君で、当時の四方割拠の群雄中、一頭地を抜く聖将であった。吉良物語に「豫州十年死せずんば旌旗中州の義士を蔽はん。況や四国平均のこと何ぞ元親を待つて後に定めん。」と、志半ばにして逝った宣経を悼んでいる。

(3) 吉良家の二柱石

名将の子、必ずしも名将に非ず、宣経ほどの名君でも、その長子、宣直は父に似ず、儒学は好まず、厭世的で禪法に遁れ、日々刹那的な生き方に流れて政に倦み、領主としても武將としても失格者で、宣直が嫡子であったことは名門吉良家の不運であった。

宣経も生前、後継問題には心痛していた。彼の臨終に際して家老の宣義は、宣経の末子千徳丸を跡目にと進言したが、宣直廃嫡問題は未解決のまま宣経は歿した。

そのあとの吉良家を支える忠臣には、宣経の時代から、彼の双翼となって、よく補佐の任に当たっていた大高坂経久と吉良宣義があった。

(4) 大高坂経久

経久は吉良氏始祖以来の家老筋で、その娘は宣経の夫人で、宣直の外祖父に当る。宣経亡き後の宣直に、経久は度々諫言していた。

そのうち経久が病に臥し、病状重しと聞き、宣直は見舞に訪れた。経久は扶け起されて対面し、血涙を絞って最後の説諭をした。宣直が辞した後、経久は子息経昌、久章等と呼んで「我死して後三四年の内に吉良の家は危ふからん。元親智謀あり、國郡盡く彼が幕下となりなん。我が家舊吉良家より取立てられて以来二十餘代相續し、且代々多くは縁を結びぬれば、恩は骨肉より深く、義は君臣より重し。然らば家の存亡は全く吉良の家運に任すべし。」と遺言し、数日後、息を引き取った。誠に南学精神に徹した指針であり、子息等は吉良氏滅亡の際、父の遺言に背かぬ最後を遂げたのである。（この後裔が「南学伝」の著者、大高坂芝山である。）

経久の死により吉良城頭を照らす篝火の一つは消え、残るは吉良宣義の光のみとなった。

(四) 吉良宣義

宣義は城主宣経の従弟で、吉良家の家老として重鎮をなしており、宣経とは「君臣顯倣誠。猶良朋偲々而切磋。情意歡協。猶舟楫水魚之相資。」の如き仲であった。その人となりについては「本強方正。足為士之儀表。好學多才。嘉謀善算。」と名将たる資質が述べられている。

宣義は宣経と共に熱心な梅軒の学徒であったが、宣直への諫言の中に、

「某は日本にて武士の家僕に生れ来て、中華の周公、孔子は我等の主君筋にてもなく、固より天竺の釋迦、達磨は我等の先祖と云ふ事でもなければ、何れをか荷担し何れをか攻撃仕るべきや。然れば只佛にもせよ儒にもせよ、武士の愛用に宣しき所をば、何れの道なりとも皆取って行はん。其用に詮なきをば誰が誘ふとも従はじと存じ候。」という行がある。儒学を修める者は、その学を尊崇する余り、無批判、盲目的に支那尊重に傾き、わが国独自の精神を忘却

しがちであるが、宣義は実に優れた見識を有する人物であった。

宣義は経久同様、吉良家の運命を案じて度々宣直に直諫した。しかし宣直は聴き入れないのでみならず、却って佞臣の讒言に乗せられて、不臣の五罪を挙げ宣義に申し開きを迫った。宣義はその使者に対し、四ヶ条は造言ゆえ申し訳がたつが、「御家督の一事はいかにも此の通り宣經公へ勧め申上げぬ。今以て存じ候は、君は閑居座禪を嗜ませ給へば、其宿志を遂げられ、政道世法の事は、其器用に付いて千徳殿へ譲られば、彼是共に願の通りにて宣しからんかと、愚意には思ひ取りて候。是れ全く御家長久の為に存じ寄る處なり。御先祖在天の神慮にかけて、毫髪も身の爲の私を計るにては候はず。此儀に付いての御尤めならば、一家三親共に罪科に行わるゝとも一言申すべき事はなし。」と断言して言を改めなかった。使者は、この件こそ諱み隠されるが身のためと進言したが、宣義は「それは君を欺く道なり。仮令骨を摧かれ身を醺にせらるゝとも、咎のなせる所は是非なく候。鼎釜前にあり、刀鋸後にありとも、何ぞ信より重からん。何ぞ義より怖ろしからんや。死生は命なり。争でか偽を以て君に對はんや」と断固として己の所信を貫いた。使者は止むを得ずそのまゝ復命したので宣直は大いに怒り、この忠臣に蟄居閉門を命じた。やがて宣義は病を得たが医薬も飲食も断ち、

丹心一片断無_レ私 幾度朗吟正氣詩

没後双瞳先欲_レ稿 勿_レ看勾踐破_レ呉時₍₄₎

の辞世の詩を賦し、衣を改め香を焚き、先君の遺影を拝したまゝ、うつ伏して息絶えた。この詩は、呉の将、伍子胥が呉王夫差により殺される時、憤って「予の没後、両眼を呉の東門に懸けよ。越軍の来りて君（呉王）を滅ぼすを見ん。」と遺言した故事とは反対に、宣義は吉良家滅亡を見るに忍びないため、己の両眼が早く枯れて明を失うことを欲

すという意味である。宣義が不退転の気魄をもって貫いた節義と、暗君宣直を恨むことなく、吉良家の家運をおもう赤心は、深くわれわれの肺腑を衝くおもしろい。

このような宣義の赤心は、梅軒によって陶冶された「学ぶところを直ちに実践窮行する」という学行不二の南学精神の強烈な発露である。大高坂芝山は、

「亶千古之赤心。不_レ負_レ所_レ學者也。」⁽⁴³⁾と称えている。

実に梅軒によって宣義は、戦国武将として稀にみる仁政を施し、また宣義は、死生の間在って毅然として人臣の道を貫き、共に南学々徒として南学史の初頭を飾った。

こうして名門、吉良家を支えた二大柱石は、暗君宣直の許で潰_{つぶ}え去り、源家の末流は悲運の道を辿ることゝなった。

(4) 吉良氏文教の最後の華

(i) 吉良求馬の奮戦

求馬は吉良家重臣、吉良宣義の嫡子で、父なき後、長宗我部元親の軍を鹿_か児_この城に迎えた。この城は吉良ヶ峰城の出城であり、吉良氏祖先伝来の地であった。しかし、この城は平地にあり防御し難い場所であった。求馬は、敵の来襲を受ければ櫓に火を放って本城へ馳せ戻れとの命を受けて、僅か四十五名の手勢で守っていた。

しかし、一戦も交えず逃げ出すとは武士の恥、死ぬのは何処も同じとの肚を決め、一同は約一千の敵兵の中に討つ

て出て奮戦し、宣義の嫡子として天晴れな最後を遂げた。まだ十八の若年であった。吉良家の庭訓を身をもって示した好個の例として今に語りつがれている。芝山はその南学伝に、

「宣義父子之死。忠孝兼成一家之風。」と賛美している。

(四) 千徳丸の初陣

鹿兒城が、吉良氏の前衛陣として二千余騎の吉良勢と元親軍四千五百の軍勢とが対峙していた時のことである。兩軍別れて人馬共一息いれているところへ、従者七、八人をしたがえた若武者一人が敵陣深く斬りかけてきた。討死覚悟の若武者は、やがて敵將のため、むざむざと首をかくれた。これが宣経の末子、当主宣直の実弟、千徳丸の十六才の初陣であり、また最後であった。

千徳丸は当時南国一の美童といわれた少年であった。十一年前の父宣経臨終の際、兄宣直の廃嫡問題で、重臣宣義は悲運の最後を遂げ、兄宣直からは敵視され、悶々として楽しまなかった。鹿兒の戦が始まるのを聞き、心中ひそかに期するところあり、この死出の初陣となった。その前夜には母の館に行き、四方山の物語りして母に添寝し、陰ながら今生の別れを告げ覚悟の出陣をしたのであった。

(イ) 慈母の悲歎と宣直夫人の孝養

愛しい千徳丸の討死を聞いた母の歎きは一方でなく、湯水も喉を通らず終日泣き暮した。彼女は高坂経久の娘で宣経に嫁し三男二女の母となったが一男二女を失い、夫宣経も今は亡く、宣直と千徳丸の二人だけが、彼女の命の綱

となつていた。如何に武家の習ならいとはいへ、花の十六で散つた愛児への悲歎は大きかつた。

その嘆きを見て、子息宣直の夫人は「我身遠方おちかたより来り参らせて、御事さまをこそ親兄弟とも頼み奉り、神明佛陀とも崇まへ申す事にて有るに、さのみ嘆かせ給ひ、御煩ひ重らせ給はゞ、我そも何を便りに残り候はん。共に存らへ共に消えて、後の世までも相伴ひ参らせんと、泣き怨みて、三日の中晝夜傍を離れ給はず、面やつれ悲しみ怛ただひ給へる、其様よにも哀れげに痛はしかりけり。御姑是を見給ひ陪づめる花を失うて、有つて詮なき老木の身なれども、御方のいたく嘆かれし事の便りなげに侍る間、さらば強ひても物賜はらんとて、粥少し参りければ、婦御も喜びて共に少し箸を揚げ給ふ。女房達はを見まゐらせて、世には婦姑の中に事なきさへ稀なるに、子とてもかく孝行にはあらじ。常々朝夕の御勤め、暑さ寒さに付けての御いたはり、誰人にかかくあるべき。」と、すぐれて孝徳の情厚い様を記している。

この宣直の夫人は、讃岐の豪族青野氏の娘で大変眉目容麗みめかたちわしいばかりでなく、文学的素養にも秀で、宣直には過ぎた夫人であつたが、好学の吉良家に相応しい人であつたようである。

(二) 吉良ヶ峰城の落日と夫人達の貞烈

鹿兒の城が陥ちてから十二日目に、吉良ヶ峰の本城は二千五百の長宗我部兵に囲まれた。守るは僅か千余の吉良勢。こゝを先途と奮戦したが、敵は城に火箭を放つた。折悪しく烈しい風で、城は忽燃たちまちえさかり防ぐ手楯なく味方は悉く討死、自害をした。この時只一騎、宣直の前に馳せ寄り、「城内炎盛んにして防ぐ手楯なし。今は逃れぬ所なれば早々御自害なされ候。某が父経久臨終に至つて、我家の存亡吉良の運命に任すべしと申しおきたる事なれば、遺言を違へ

ず九泉の下までも相伴ひ参らせん⁽⁴⁵⁾」と言うのは大高坂経久の子、久章であつた。宣直はその志を喜び久章に謝し、最後の覚悟を決めた。その時の模様を吉良物語には「傍の北の方に向ひて、『其方は女性の身なれば、縦ひ敵の方に出られたりとも、喪ひ申すまでの事はよも致し候はじ。只今落人の中に紛れて、一先忍びて見給へかし。某は名を惜む家なれば義旌の下にて自殺せん』と宣へば、簾中聆きも敢へず『怨めしの仰をも承るものかな。士の妻たる者が夫の死するを見捨てゝ落行きたる例未だ聞きも習はぬ事なり。妾が里も御家程にこそはなけれども、青野の某として數代弓矢を取つて人に知られたる者ぞかし。其れが娘なるをば今まで知ろしめされずやありけん。さのみ命の惜しくは候はぬものを、宣ふ處僻言かな』と言ふより早く守り脇指を胸に突き立て、眠るが如くにて其の俛消入り給ひける。婦人には三従の道を守つて、百年の苦樂は他人に因る事とは云ひながら、さしたる思出もなく、僅か二十三の齡を一生として世を去り給ふこそ哀れなれ⁽⁴⁶⁾」と健氣な宣直夫人の最後を物語っている。

元親は、予てより落城の際には宣直夫人を故里の青野氏に送り届け、四国平定の折には青野党と好を結ぼうとしていた。このように落城などの折、夫人や幼兒を落ち延びさせる例は多々あつたが、宣直夫人は夫に先立って自害し、元親の願望は果せなかつた。

宣直の母は「若き人を先に立て老の身の後になりたる無念や」と血汐に染つた宣直夫人の刀をとつて自害し果てた。

宣直も二人の後を追つて切腹し、それを見届けて後、久章は敵と切り合い炎の中に消えた。

女童僕隸達は皆命を助けられたが、梅軒によつて陶冶された海南武士は悉く、恩に報い、義に殉じ、城主の夫人達も孝徳、貞烈を身をもつて履行し、城と運命をともにした。

こゝにおいて源家の末流は四百余年の歴史の跡を、地上に一物だに止めなかった。しかし吉良氏文教の精華は、この落城史に昇華され、忠、孝、貞の名は永遠に消えない落日の残照となつて千載の後までも吉良ヶ峰城址の空を染めている。(以下次号)

- (1) 寺石正路『南学史』九二四頁。
- (2) 高知県立図書館刊『皆山集』第二卷五四二頁。
- (3) 山本大『高知県』七九頁。『高知県の歴史』七〇頁。
- (4) 山本、前掲『高知県の歴史』七〇頁。
- (5) 中村市史続編三八〇頁。
- (6) 前掲『皆山集』第二卷五四一頁。
- (7) 寺石、前掲『南学史』二二〇頁。
- (8) 日本古典全集・本居宣長『玉かつま』九の卷〔花の雪〕五三。
- (9) 足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』五四三頁。
- (10) 寺石、前掲『南学史』一七七頁。
- (11) 前掲、中村市史続編三八〇頁。
- (12) 長岡元康「土佐一条氏関係史料」『土佐史談』七〇号八三頁。
- (13) 寺石、前掲『南学史』九三七頁。
- (14) 滝石登鯉「南学の源流にさかのぼりて」『土佐史談』一一八号、一二三頁。
- (15) 山本、前掲『高知県』七四頁。
- (16) 前掲、七九頁。
- (17) 足利、前掲『鎌倉室町時代之儒教』三〇六、三〇九頁。六八六、六八九頁。
- (18) 前掲、五七七頁。

- (19) 前掲、五七八頁。
- (20) 眞西堂如淵原作『吉良物語』四〇～四二頁。
前掲、四二頁。
- (21) 小関豊吉『南学と土佐の教育』七頁。
- (22) 大高坂芝山『南学伝上巻』一頁。
前掲、一頁。
- (23) 眞西堂如淵、前掲『吉良物語』四五～四六頁。
前掲、一九頁。
- (24) 糸賀国次郎『海南朱子学発達の研究』二二頁。
- (25) 松澤卓郎『南学と南学徒たち』二九頁。
- (26) 大高坂、前掲『南学伝』二頁。
- (27) 眞西堂如淵、前掲『吉良物語』四七頁。
- (28) 大高坂、前掲『南学伝』二頁。
- (29) 眞西堂如淵、前掲『吉良物語』二八～二九頁。
- (30) 眞西堂如淵、前掲『吉良物語』二八～二九頁。
- (31) 吉永豊実『南学と土佐藩の法制』四六～五〇頁。
- (32) 中島建依別『土佐文化史伝』六〇頁。
- (33) 眞西堂如淵、前掲『吉良物語』六六頁。
前掲、八一～八二頁。
- (34) 大高坂、前掲『南学伝』三頁。
- (35) 眞西堂如淵、前掲『吉良物語』九二頁。
前掲、九七～九八頁。
- (36) 大久保千濤『土佐の南学』九〇頁。

- (42) 中島鹿吉『南学読本』三八頁。
(43) 大高坂、前掲『南学伝』三頁。
(44) 眞西堂如淵、前掲『吉良物語』一一九頁。
(45) 前掲、一二六頁。
(46) 前掲、一二六～一二七頁。